MEIJI MURA

明治村だより

Vol.54 2008 Winter

かたどられるウシ ―うし年郷土玩具展― 2
日本各地の門松・しめ縄めぐり
―郷土色豊かな正月飾りとその意味― 4
冬の催しもの 5
A La Meji-mura 6

平成20年12月15日発行
「明治村だより」第54号（平成20年 冬）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第55号発行のお知らせ
発行時期　平成21年3月中旬（予定）
申込方法「明治村だより」第55号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円切手とともに封書にてお申し込み下さい。

表紙
帝国ホテル中央玄関 窓

12月						2008年
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

1月						2009年
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

カレンダーの■が休村日です

かたどられるウシ
—うし年郷土玩具展—

会場：三重県庁舎（1丁目13番地）
期間：12月13日～2月22日

平成二十一年の干支は「丑」です。干支の「丑」には動物の牛が充てられます。大漢和辞典によると、この「丑」という字は、「チウ」・「チユ」と読み、動物の牛、十二支の第二位、方位では北東で十二月を指すとあります。また、中国で後漢の時代に編まれた漢字の字典『説文』では、「丑を以て手の三指を聯綴（つらねてとじること）して、寒氣の為に、未だ事を成し得ぬ意を示し、寒氣が解けるのを待ち、將に手を擧げて仕事をし始めようとする義を表す」とされています。「丑」という字には、動物の牛という意味以外に様々な意味が込められています。

今回の企画展では、丑年にちなんで、博物館明治村が所蔵する様々に"かたどられた"郷土玩具としての牛をご紹介します。牛が家畜として日本に持ち込まれたのは非常に古く、弥生時代であったといわれています。その後、農耕用・交通・運搬手段・信仰など、牛は私たちの生活と様々な場面で関わってきました。そのため、展示でご覧いただく郷土玩具の牛は、地方色豊かなものとなっています。

そこでまず、展示のご案内に代えて、郷土玩具としての牛が様々に"かたどられる"背景となった、私たちの生活と牛との関係についてご紹介します。

写真1　赤べこ（福島県）

私たちの生活とウシ

現在私たちが目にする牛は、いわゆる家畜ウシと呼ばれる種の牛です。中国や朝鮮の系統の家畜ウシが弥生時代中期に西日本にもたらされたといわれています。当初牛は、農作業で犂耕（牛馬に犂を引かせることによる耕作）などに用いるための役畜（労役の目的で飼育する家畜）として飼育されました。

仏教が伝来した八世紀ごろには、たびたび食肉禁止令が出されています。これは、仏教の肉食を忌避する思想に影響されたものであるという見解もありますが、一方で農耕や輸送手段としての需要が高まり、牛を役畜として保護するための施策であったという見方もあるようです。その後、牛は、日本各地で役畜として飼育され、労働力として欠かせない存在となっていきました。

しかしやがて、農耕機械の導入や交通網の整備に伴う輸送手段の発展により、明治から昭和中期にかけて牛が役畜として飼育される事例は減少していきます。

一方で明治時代に入ると、牛は食用家畜として盛んに飼育されるようになりました。中世には「酥（そ）（酥）」とよばれる牛乳を煮詰めたものが薬用として珍重されたり、江戸時代においても牛の乳や肉が食されていたようですが、それらは大名や貴族など限られた人々による需要でした。明治期には、牛乳を飲ませるミルクホールや、文明開化の象徴としても有名な牛鍋屋などで庶民の間でも牛を食すことが広まっていきました。

とくに、牛の肉を食すことが盛んになったきっかけは、外国人の渡来であったようです。幕末以降、外国人の居留地で牛肉の需要が起こり、そこに牛肉を納めていた人々によって牛鍋屋がはじめられました。明治四（一八七一）年に戯作者である假名垣魯文が著した『安愚楽鍋』初編に、「牛鍋食はねば開化不進奴」という文句がみられるように、当時牛肉を食すことは、文明開化が体現される行為として考えられていたようです。

明治時代の牛肉生産量をみてみると、明治十（一八七七）年の成牛屠殺頭数が三万四千頭であったのに対し、日清戦争が始まった明治二十七（一八九四）年には十四万三千九百頭という約四倍もの成牛が屠殺されています。「此肉がひらけちやアぼたん（猪肉）や紅葉（鹿肉）はくえやせん（カッコ内筆者）」と『安愚楽鍋』に登場する「西洋好」が話しているように、明治期に牛肉の消費量は飛躍的に増加します。その契機となったのは、日清・日露戦争の帰還兵士たちに依るところが大きいとされています。富国強兵の観点から、軍隊食に「牛肉の大和煮」などが取り入れられるなど、当時軍隊では肉食が奨励されていたようです。

このように牛は、関わり方に変化は見られるもの

の、私たちの生活と長く、そして深い関わりを持ってきました。そのため、日本各地で牛は信仰の対象となったり、富や豊穣の象徴となるなど日本人の精神的な拠りどころともなってきました。現在でも牛突きや牛祭が催されたり、稲作や水・雨などと関連した牛の信仰が各地でみられます。現在でも牛は私たちにとって重要な財産であるといえます。

郷土玩具とウシ

先に、郷土玩具として様々に牛が"かたどられてきた"背景である、牛と人間との深い関係についてご紹介いたしました。ここでは郷土玩具について簡単にご紹介いたします。

玩具評論家の斉藤良輔氏によると郷土玩具とは、①明治期以前から存在した身近で安価な材料を使用していること、②手作りであること、③民間信仰と結びつき縁起物的な性格を持っていること、④各地の習俗と結びつきが深く季節感に富んでいること、⑤江戸時代から産業革命前の明治期にかけて誕生し、各地城下町文化などを母胎にした郷土色を帯びていること、という特徴を有したものとされています。

今回ご紹介する牛の郷土玩具も土、紙、藁などを用いた手作りのものです。また、五穀豊穣、学業成就、病気平癒などの縁起が付与されており、誰かに贈ることやそれを持っていること、あるいは飾っておくことにも意味がありました。

例えばその代表的な物として、福島県会津地方の赤べこ（写真1）は、かつて会津で疱瘡が流行した際に、子供に贈ったところ疱瘡が治ったという言い伝えがある郷土玩具です。赤い色は、魔除けや厄除けの色とされ、赤べこ以外にも赤い色の郷土玩具や土産物は特に「赤物（あかもの）」とよばれました。

明治後期から昭和初期にかけては郷土玩具を収集することが、大人、特に富裕層や学者、そして文人などの趣味としても人気を博しました。彼らによって、郷土玩具の収集、研究、展示を目的とした同好会が結成されたり、展覧会が開かれるほどでした。その端緒を開いたものとして、明治二十四（一八九一）年に日本各地の郷土玩具の画集『うなゐの友』（写真2）を編纂した、清水晴風（しみずせいふう）が中心となって結成された「竹馬会」が挙げられます。「竹馬会」は、清水晴風の幼なじみらが東京向島の料亭に集い、全国に伝わる郷土玩具を持ち寄って見せ合うことを楽しむ会でした。これらの活動はやがて、明治から大正、昭和にかけて人形愛好運動などの、趣味としての郷土玩具収集という、郷土玩具に対する新たな需要として結実していきます。その結果、地方の土産物として国内外の観光客向けに大量生産される郷土玩具も見られるようになりました。現在でも土産物、縁起物として多くの人々に親しまれています。

このように郷土玩具は、現在私たちがイメージする子供たちの遊び道具として以上に、幅広くかつ深い意味が込められて人々に愛されてきました。

写真2　『うなゐの友』

今回ご紹介する牛の郷土玩具は、これまでご紹介したように、人と牛との深い関わりを背景として、多くの人々に愛されて伝えられてきました。そしてまた郷土玩具は、子供の健康、農作物の出来、あるいは遠く離れた「ふるさと」への郷愁といった様々な想いが投影されてきました。

今回の展示を通して、郷土玩具として"かたどられてきた"牛に託された様々な願いや祈りに、皆様それぞれが想いを馳せていただくとともに、木や紙、土といった素材のもつ、素朴な味わいをお楽しみいただければ幸いです。

●参考文献・ホームページ
・安部禎　一九九四『十支の動物誌』技報堂出版
・斉藤良輔　一九七一『日本の郷土玩具―その歩みと系譜―』『新装　普及版　郷土玩具辞典』東京堂出版
・東京都江戸東京博物館　二〇〇五「美しき日本―大正昭和の旅　展」
牛の博物館ホームページ
http://www.isop.ne.jp/atrui/mhaku.html
（二〇〇八年十一月十二日取得）
社団法人全国肉用牛振興基金協会ホームページ
http://www.nbafa.or.jp/（二〇〇八年十一月十二日取得）

●企画展体験イベント●
「うしの紙絵馬をつくろう！」

・開催場所：三重県庁舎前・企画展示会場内（1丁目13番地）
※1月1日から4日は、食道楽のカフェ前の芝生広場にて実施いたします。
・日　　時：12月13日から1月31日までの毎週土曜日
（子どもかがやきプランと併せて実施）
1月1日～4日 いずれも10時から15時まで

今回の企画展では、お正月の郷土玩具として絵馬も併せて展示致します。そこで展示と併せて、上記の通り紙絵馬作り体験を開催致します。

紙に描かれた「うし」に好きな色を塗って、2009年への皆さんの願いを明治村オリジナルの紙絵馬に託してみてはいかがでしょうか？できあがった絵馬は展示室内に飾っていただくこともできます。

参加費は無料です、皆様ふるってご参加ください。

日本各地の門松・しめ縄めぐり

―郷土色豊かな正月飾りとその意味―

期間　1月1日～31日（門松は12日まで）

全国から建造物が移築されている博物館明治村では、村内二十箇所において、ふるさとの特色ある正月飾りを行います。

正月のしきたりは、地方や家によって異なり、また、しめ縄の形もその土地によって違っています。博物館明治村では各地の正月飾りと共に、正月の室礼を行いました。

写真1　第八高等学校正門の門松

正月を迎えるために

正月準備を行う時期には決まりがあります。正月事始の十二月十三日に正月用の木を山へ採りに行く「松迎え」を行います。その後、早いところでは十二月二十日ごろから、一般的には二十六～二十八日、三十日に飾りつけます。二十九日に飾るのは「二重苦」、「九松」（苦待つ）として縁起が悪いとして、また三十一日に飾るのは「一夜飾り」といい、神様を迎えるために一日では誠意が足りないとして避ける地域や家もあります。さらに「煤掃き」とか「煤払い」と呼ばれる一年の塵・ほこりを祓い清める大掃除を行います。現在では年末に行うのが一般的ですが、もともとは松迎えと同じく十三日に行われていました。

明治村では、十二月に入るとすぐに煤払いを始め、手の届かないような高所の窓や柱、神棚などの掃除をし、本年は、十二月十六日（予定）からは第八高等学校正門の門松を皮切りに、順次正月飾りを行います。

門松―神様を迎える目印

正月は元々、太陰暦でいう一年の最初の月を指し、その最初の日の朝である元旦には、「歳神様」、「お正月様」、「歳徳様」と呼ばれる神様をお迎えして一年の豊作を祈願しました。この神様が迷いなく家を訪れ、迎えるための目印として立てられたのが門松で「松飾り」とも呼ばれます。古くから、門松に用いる木は松に限らず常緑樹が使用されていましたが、室町時代になって「松は千歳を契り、竹は万代を契る」という諺から松と竹が流行するようになりました。

現在、一般的に思い浮かぶ門松は江戸時代になってから整った形式で、先端を削った孟宗竹を三本並べて立て、そこに松を添え、根元を土で固めて藁を巻いたり薪で囲ったりします。明治村でも第八高等学校正門などでこの形のものを立てています（写真1）。

一風変わっているのが東松家住宅の門松です。名古屋市中心部における門松は『名古屋叢書　尾張の年中行事』において、「…松は一本なれど、葉竹をあまた立つるなり。片々に、二、三本づつは通例なり。…その横より竹を一本、または二本も入れ違ひにして、真ん中のしめかざりの下に、ひしのかたちに組みちがへたり。…」と描かれています。「門松」と呼ばれていますが、松は竹の足元に低く添えてあるのみで、竹がメインとなっています。現在では見ることは出来ませんが、前掲書にはこの飾りを行った家が通り沿いに並んでいる様子が描かれています（写真2）。

写真2　名古屋市中心部の門松（『名古屋叢書』より）

しめ縄―神様のいる清浄な場所

しめ縄は訪れた神様に家に留まってもらうための結界としての役割を持っているため、玄関や神棚、床の間、水回りなど全体を繋げて、家を囲むようにするのが本来の飾り方です。この形式は最近少なくなりました。西園寺公望別邸「坐漁荘」のあった静岡市（旧清水市）興津清見寺町では、町全体で神様を招くために町内の通り沿いにぐるりとしめ縄を飾ります。現在ではこうした形式を簡略化し、牛蒡しめなど太く短いものや、玉しめ、輪しめなどの形に結び、ダイダイやユズリハ、ウラジロなどをつけて華やかにしたものを玄関に飾ることが多くなりました。

第四高等学校武術道場「無声堂」で飾られている金沢市のしめ縄（写真3）は、竹に藁を付けて羽根に見立てた「鶴飾り」と、亀を表した「三重のしめ縄」が組み合わされており、現在も金沢市の中心部で飾られています。この「三重のしめ縄」は、親亀、小亀、孫亀の親子三代を表し、長寿を意味します。また、新年を迎えるにあたり、家内安全、五穀豊穣への祈りと喜びを込めて、おめでたが三つ重なるようにとの願いも込められています。こうした伝統的なしめ縄を飾る一方で、金沢において門松は、江戸時代、特権階級にのみ許されたものだったため現在もほとんど立てられません。

宇治山田郵便局のあった伊勢市のしめ縄は、中央に「蘇民将来子孫家門」あるいは「笑門」「千客萬来」などと墨書きした門符（木札）が付いています。伊勢市には、昔この地を訪れたスサノオノミコトに、貧しいながらも慈悲深い蘇民将来が一夜の宿を貸しました。それに感激したミコトは旅立つ時、「今後は門符を門口にかけておけば、子孫代々疫病から免れる」と言い残し、それ以来、蘇民将来は疫病が流行ってもその災いから逃れて代々栄えた、という伝説が伊勢地方にはあります。これに基づいて蘇民の子孫である証拠として門符を掲げ、無病息災を願うようになりました。こうしたことから、この地域ではしめ縄は不浄なものや邪悪なものから家を守るため、現在でも一年中飾っておく習慣があります。明治村でも「千客萬来」の門符を掲げたしめ縄を一年を通して飾っています。

写真3　第四高等学校武術道場「無声堂」のしめ縄

正月の行事

さて、神様をお迎えした家の中では、縁起物で飾り付けられた鏡餅やお節料理を供え、一年の邪気を払い無病息災を願って屠蘇を飲みます。東松家住宅と京都中井酒造ではそれぞれのお節料理を再現し、料理に込められた願いと共に、地域による料理の違いを比べていただけます（写真4）。

また、「森鷗外・夏目漱石住宅」では正月の室礼の他、漱石・妻・息子の正月の様子を紹介します。夏目漱石の息子、伸六氏の『父と母のいる風景』には、「（子どもたちは）この日ばかりは、ぱっと撥ね起き、身仕舞を正して、屠蘇を祝ってから、一家揃って雑煮の膳に向かう…頭に小さな獅子頭をのせた角兵衛獅子から、猿廻しと云った連中が、朝日を受けて軒並みに風にはためく日の丸の旗と門松の間を潜り抜け、後から後からと、勝手口へ舞い込んできた。…」、「父のところへは、入れかわり、立ちかわり、随分と大勢の年賀の客が、朝っぱらから、つめかけてきた様だが…』など、漱石と過ごした正月が生き生きと描かれており、その光景を想像していただければと思います。

写真4　東松家住宅のお節料理

写真5　東松家住宅の正月飾り準備

期間中「明治村の門松めぐり・しめ縄めぐり」や「夏目家のお正月」などの、解説つきのワークシートを配布（正門・北口他、村内各所にて）しますので、これらを片手に日本各地の正月飾りをご覧下さい。普段は見ることの出来ない様々な地方の正月飾りを見比べて、意味を知り、失われつつあるそれぞれの土地の正月を見直すきっかけとなれば幸いです。

明治の標（しるし）

呉服座の座紋

これは重要文化財に指定されている芝居小屋・呉服（くれは）座の座紋です。呉服座の名の由来は、呉服座のあった大阪府池田市の古名、「呉服（くれはとり）の里（呉国（中国）から渡来した織工の住む場所の意）」に由来するといわれています。しかし「くれは」と読むのは難しく、また呼びにくいため通称「呉服座」と人々に呼びならわされていたようです。その証拠に呉服座に対抗すべく新たに建てられた芝居小屋は、福の数で勝る「七福座」という名だったとか。

呉服座の座紋の中央には劇場を示す「座」という漢字が、そしてその周囲に円状に「お多福」の横顔が五つ配され、座紋から「五福座（ごふくざ）」と読ませています。このことからも「くれはざ」より「ごふくざ」という名で人々に親しまれていたことがわかります。

明治時代は今より娯楽が少なかったと言われますが、呉服座の座紋からは、明治の人たちが自ら楽しむ「心の豊かさ」を持ち合わせていたことが読み取れます。

浪漫チック 明治村

● 12月13日（土）～2月22日（日） ● 休村日は裏表紙を参照ください

古今東西「あったかお雑煮フェア」

各地方に伝わる個性豊かな美味しいお雑煮をお楽しみ下さい。

かたどられるウシ―うし年郷土玩具展

〈三重県庁舎1F特別展示室〉

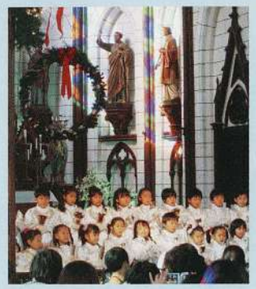
2009年の干支「丑」を題材にした日本各地の絵馬、羽子板などの郷土玩具の展示を行います。

★クリスマスイベント★

★クリスマスデコレーション

～12月25日（木） 〈聖ザビエル天主堂、聖ヨハネ教会堂ほか〉

村内の歴史ある教会堂・洋館などがクリスマスの装いに包まれます。クラシカルな雰囲気をお楽しみ下さい。



★クリスマスミサ

12月23日（祝） 11：00～

〈聖ザビエル天主堂〉

★クリスマスコンサート

・ゴスペルコンサート
12月20日（土）13：00～、14：00～ 〈聖ザビエル天主堂〉
出演／ゴスペルはるもに

・ハンドベルコンサート
12月21日（日）13：00～、14：00～ 〈聖ザビエル天主堂〉
出演／金城学院中学校ハンドベルクワイア

・トーンチャイムコンサート
12月23日（祝）13：30～、14：30～ 〈聖ザビエル天主堂〉
出演／カモミール

・クリスマス演奏会
12月24日（水）13：00～ 〈聖ザビエル天主堂〉
出演／師勝はなの樹幼稚園

バレンタインイベント

シニア・バレンタイン 100

2月1日（日）～2月15日（日）

お二人の年齢が合わせて100歳以上のカップルにはどちらか1名様の入村を無料にし、ささやかなプレゼントを進呈します。［要証明］

バレンタイン・コンサート

2月7日（土）、8日（日）、11日（祝）、14日（土）、15日（日）

13：00～、14：30～ 〈聖ザビエル天主堂〉

初春イベント

日本各地の門松・しめ縄めぐり

1月1日（祝）～31日（土）

〈正門・東松家住宅・京都中井酒造・宇治山田郵便局・高田小熊写真館ほか〉

村内20箇所の展示建造物に、各地の伝統的な門松（～1/12まで）やしめ縄を展示します。
地方色豊かな特色ある正月飾りを見比べてみてください。

祝餅つき

1月2日（金）

12：00～、14：00～

〈呉服座前〉

出演／めでたや

パフォーマンスをしながらの餅つきを行います。なお、ついたお餅を皆様に振舞います。

※お餅には数に限りがございます。当日整理券を各回の約20分前より会場にて配布いたします。

新春祝い「獅子舞・祭り太鼓公演」

1月3日（土） 13：00～、14：00～ 〈呉服座前〉

出演／歌舞劇団 田楽座

信州伊那谷の田楽座による新春を祝う賑やかな獅子舞や祭り太鼓の公演を行います。

新春コンサート

1月4日（日） 13：00～、14：00～ 〈聖ザビエル天主堂〉

日本のあそび体験

1月1日（祝）～4日（日） 10：00～15：00

〈食道楽のカフェ前芝生広場〉

凧揚げ・竹馬・ケン玉・羽根突きなど昔懐かしい日本の遊びをご家族でお楽しみください。

新春お年玉プレゼント！ 1月1日（祝）～12日（祝）

祝成人！「成人の日」入村無料

1月10日（土）～12日（祝） ［要証明］

あったかいろいろ

ホッと（HOT）ギャラリー

〈東山梨郡役所〉

暖かなギャラリーで、近岡善次郎氏の水彩画「明治の西洋館」をお楽しみください。
ホットドリンクのサービスもございます。

花道が創りだす演出効果

●呉服座（四丁目49番地）

オッペケペの口上に誘われて木戸を潜ると、江戸の名残をとどめる芝居小屋、呉服座（重要文化財：写真1）の内部が見渡せます（写真2）。土間から舞台を眺めると、当時最高の娯楽であった芝居を、人々が嬉々として観劇した情景を思い浮かべる事が出来ます。人々が芝居と一体化して楽しむ事が出来たのは、劇場の演出にあるのではないでしょうか。

伝統演劇にはそれぞれに劇場様式が確立しています。例えば、舞楽には勾欄（こうらん）の付いた四間四方の舞楽殿、能には「橋掛（はしがか）り」のある三間四方の能舞台があるように歌舞伎には歌舞伎舞台があります。今回は歌舞伎独自の舞台機構「花道」を能舞台との相違点からみていきたいと思います（※1）。

歌舞伎と能の相違は、まずその発生過程にあります。能は室町時代猿楽・田楽から派生し、寺社を中心とした勧進興行から起こった芸能です。一方、歌舞伎は一六〇三（慶長八）年、出雲の阿国（おくに）が創始した歌舞伎踊「阿国歌舞伎」が起源だといわれています。また、演劇の性質も能が神霊の演劇であるのに対し、歌舞伎は人間の演劇と言えます。そのことは、能では演じる役者が面をつけ、神・鬼・亡霊などこの世のものではないものを表現し、歌舞伎では『かぶきの草子』に「…前略…人の心もうつろうや、僧も法師もうち連れて、恥も人目もうち忘れ、芝居にさわぎ踊りけり」と記されていることからも理解できます。能ではこの神霊的な部分を表す舞台演出に「橋掛り」が重要な役割を果たします。つまり「橋掛り」は舞台の延長として異次元のものが時空を超えて現世の場である舞台に渡ってくる、この世と異空をつなぐ橋として使用されているのです。さらに、能が神霊の演劇であることを端的に表している点として、舞台の一部として白洲が残されています。白洲は舞台と客席の結界として存在し、舞台と客席とを切り離す事により能をより神秘的なものにしていると考えられます（図1）。

一方、歌舞伎は阿国歌舞伎以来、その性質は女歌舞伎―若衆歌舞伎―野郎歌舞伎へと変化し演目が多様化してきました。また、観客も一緒に楽しむ舞台演出は能舞台では補いきれず、歌舞伎独自の新たな舞台が必要となり、十七世紀末の貞享・元禄頃にそれまでにはなかった「花道」が出来上がったと考えられます。

呉服座の平面図（図2）を見ると、花道は、舞台から客席を縦断するように張り出したもので、舞台の下手側の「花道」と上手側のやや狭い「仮花道」（※2）の二種類があります。花道は、単に舞台へ続く通路ではなく、出端（では）や引込みでの六方（ろっぽう）などを際立たせる空間として役者の魅力を増大させる効果がありました。客の目当ては贔屓（ひいき）の役者で、花道は役者を間近で見られる、いわば役者と観客の交歓の場所でもあったのです。ここに阿国歌舞伎以来の、役者も観客も一緒になって楽しむ歌舞伎の本質を垣間見ることが出来ます。

さらに「花道」には「スッポン」と呼ばれる「迫（せり）」が設置され（写真3）、他の演劇にはない不思議な演出効果を発揮します。この花道の下から登退場するものは人間界とは次元の違う、妖怪・幽霊、また超人的霊能力を持つ人間などで、スッポンは意外性や特殊性を作り出す奇抜な舞台機構だといえます。このように花道は、舞台の延長、外界との連絡など、観客の想像力を利用して演劇を自由自在に作り出すことが出来ます。

江戸時代に成熟した歌舞伎は江戸後期に完成を見ます。明治時代に入ると、文明開化の影響を受け演劇活動や劇場形態も変化して行きます。例えば、上流階級や外国の人々を意識し、高尚な芝居や教育に役立つ史実本位の演劇を進める勧告や通達を、明治政府は明治五（一八七二）年に出しています。

また、劇場の近代化もこの頃からで、江戸三座の一つ、森田座が新富町に進出し、劇場の構造や機能改革を行なっています。明治十一年森田座から改称した新富座の内部を描いた錦絵（写真4）には、劇場内部にガス燈を設置するなどの近代化が見られます。しかし、江戸時代に完成した舞台機構がそのまま取り入れられていることが錦絵からも窺え、花道が芝居を行なう上で欠かせないものになっていたことが分かります。

呉服座では毎日、建物ガイドで普段入ることの出来ない「奈落」や「楽屋」などを案内しています。実際に客席に座り、舞台に立って当時の劇場を体験してみてはいかがでしょう。

※1 歌舞伎は舞台機構が完成するまでは能舞台を襲用していた。

※2 「仮花道」は使用される機会が少なく、そのため関東大震災以前の劇場には設置されていたが、震災以後設置されなくなった。

参考文献・参考資料

・河竹登志夫『歌舞伎』二〇〇四 東京大学出版
・「歌舞伎辞典」一九九〇 平凡社
・多田富雄『能の見える風景』二〇〇七 藤原書店
・名古屋能楽堂パンフレット
・『重要文化財（建造物）旧呉服座保存修理工事報告書』一九九八 博物館明治村

写真1

写真3

写真2

図1 能舞台（「名古屋能楽堂パンフレット」より）

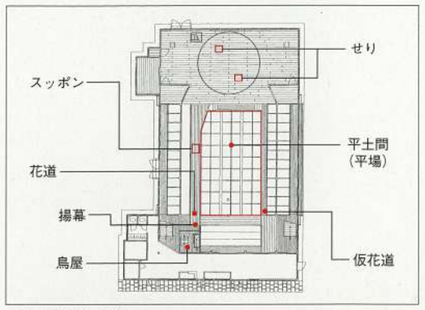


図2 呉服座平面図

写真4 「新富座本普請落成初興行看客群集図」